

申請者	学科名	デザイン工学科	職名	准教授	氏名	西川 博美
調査研究課題	日本統治時代台湾における産業施設跡を現代アートギャラリーとしての活用に関する研究					
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	西川 博美	デザイン学部・准教授	アジア都市史	研究全般	
	分担者	黄 蘭翔	国立台湾大学大学院芸術史研究所・教授	アジア建築史		
調査研究実績の概要	<p>申請者はこれまで、日本統治時代の台湾全島において、市区改正事業によって軒下歩道を伴う特徴的な町並が形成されていく過程を明らかにした。更に昨年度から今年度にかけて、日本統治時代の台湾で数多く建設された武徳殿について、その建設経緯と建設後の用途、建物の様式について日本国内で建設された武徳殿との比較を含め、明らかにした。この台湾の武徳殿のいくつかは、現在も台湾に残されているが、武道場として使用されているものもあるが、街の集会施設やアートギャラリーとして使用されている事例も見られ、興味深い活用方法である。</p> <p>申請者は主に前半期間中に、この台湾の武徳殿の建設の経緯と施設の利用について研究を行い、8月末に開催された日本建築学会大会[九州]で口頭発表（添付資料1）と、10月に開催された国際会議ISAIA2016（東北大学）への投稿と口頭発表（添付資料2）を行う成果をあげた。ここでは、台湾の武徳殿は、日本本土での普及とは異なる側面を持ち、台湾総督府の支援も受けながら進んだが、それは、植民地経営において果たすべき重要な公的役割を担う施設として建設され利用されたものであったことを明らかにした。台湾の武徳殿は、和風の意匠を持つ重要な公的施設として、都市（地域）計画に位置づけられていたことも十分に考えられる。このことは、武徳殿が現在、武道場としての活用だけではなく、集会場やアートギャラリーといった地域に親しまれる用途で活用されている実態にも関連するのではないだろうか。</p> <p>更に申請者は後半期間に、台湾の日本統治時代に建設された製糖工場や鉄道修理工場といった大規模施設に着目し現地視察と資料収集を行った。近年の台湾では、工場や樟脳工場、煙草工場など当初の用途では使われなくなった施設を、新たな文化施設、とりわけ現代アートの製作・展示施設として再生させる事業が進んでいる。これらは、国立台湾博物館の事業としてや、台北市などの都市計画事業として取り組まれている。</p> <p>申請者が今年度新たに着目した台湾の製糖産業は、日本統治時代に台湾の産業を代表する生産活動の一つであった。台湾総督府の政策の下に4つの製糖会社が設立され、第二次世界大戦終了時には45の製糖工場が稼働していた。この製糖工場では多くの人々が働いていたが、従業員寮や家族のための小学校、商業施設、宗教施設等も備えた施設であった。それが、東南アジアの安価な生産に押され、現在は2つの工場が稼働するのみで、1980年代にほとんどの工場が閉鎖された。現在多くの工場は解体されてしまったが、一部は、古跡としてすべての建造物、もしくは一部の建造物を指定することで保存されている。</p> <p>その中で、申請者は現在も製糖工場として稼働中の虎尾製糖工場（虎尾糖廠）の視察と、現在は太鼓芸術の拠点として観光化された仁徳製糖工場（仁徳糖廠）の視察を行った。虎尾製糖工場は、1906年に大日本製糖株式会社によって工場が建設されたが、現在も敷地内に歴史的な工場、機械、線路、列車、管理事務所や従業員寮の全てが保存されている。現役の工場として稼働しながらも、新たにこの遺産を紹介する展示ホールも建設され、観光客の受け入れも行っている。</p>					

<p>調査研究実績 の概要</p>	<p>一方、仁徳製糖工場は、2003年に操業を停止し2005年より十鼓文創という太鼓のパフォーマンス楽団によって文化村として再生させている。この仁徳製糖工場は文化財としては指定されていないため、大きな水タンクや倉庫、工場を柔軟に改造し再利用され、地元の人々にとっての魅力的な観光地として賑わっている。この視察した2か所でそれぞれ聞き取りも実施し、現在に至る経緯を理解することができた。その後、台湾の製糖業に関する資料の収集も行ったが、次年度は引き続き現地に残された製糖工場跡の視察と、論文としてまとめる作業を実施したいと考えている。</p> <p>こうした産業遺産の保存と活用は日本でも横浜のBankARTや舞鶴のレンガ倉庫、倉敷のアイビスクエアなどの事業が見られる。また、富岡製糸場が世界遺産に登録されたように、現在、近代化産業遺産への注目が高まっている。わが国では、1990年度より近代化産業調査が始まり、ダムや橋梁、鉄道施設などの土木構造物も調査の対象となり、1993年にはその成果として藤倉水源施設と碓氷峠鉄道施設が重要文化財に指定されている。そしてその後近代化産業遺産の保存と活用についての検討が進められてきている。</p> <p>近代産業は、産業の元となる資源の生産、生産地と工場間の運搬施設、生産者と製造工場働く人々の生活や社会福祉など、都市計画と深く関わったものであり、その遺産は現在でもリビングヘリテイジとして地域に根付いているものも多くある。その意味でも近代の産業遺産の保存と活用の研究は、都市計画にも関わる課題の発見にもつながっていると見える。</p> <p>3月には、DocomomoInternational（モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織）の会長に同行して岡山と瀬戸内の近代建築の視察と聞き取りを行い、地域の自然や産業と融合するアート施設、文化施設、教育施設についての理解を深めた。近代産業化遺産の保存・活用においては、そこにある建物や施設の本質的な価値を確かに保存しながらも、現代に新たに不可される機能と、それに必要となる改修工事が適切に執り行われ、魅力的な活用が図られることが求められる。</p> <p>今後は引き続き、台湾と国内を中心に、産業遺産跡の転用事業の過程や具体的な設計改修の方法について、また行政との関係について、更に詳しく調査して分析し、報告書及び論文としてまとめていきたいと考えている。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>(1) 西川博美、「台湾における武徳殿の普及と利用についての研究」、日本建築学会大会[九州]学術講演梗概集、pp.847-848、2016年8月（添付資料1）</p> <p>(2) Hiromi Nishikawa、「A Study on the Construction Process of Butokuden and their Role in Taiwan under Japanese Rule」、ISAIA2016、pp.1277-1282、2016年10月（添付資料2）</p>